



第9期北海道総合開発計画キックオフ 道南地域共創シンポジウム 〈共に創る、道南の未来〉

〈はじめに〉

「第9期北海道総合開発計画」が令和6年3月12日に閣議決定されたことを受け、函館開発建設部では、渡島・檜山管内を対象に「共に創る、道南の未来」というテーマで、同年9月22日、渡島管内松前町において道南地域共創シンポジウムを開催しました。

本シンポジウムは、当部のほか、北海道渡島総合振興局、松前町、檜山管内の奥尻町の4者による共催となります。シンポジウム会場には、約50名の方にご参加いただきました。

本稿では、その開催概要をお伝えします。

【開会挨拶】松前町長 若佐 智弘

第9期目となる「北海道総合開発計画」が閣議決定され、北海道においても新たな「北海道総合計画」が策定されるなど、北海道の将来像に関する重要な計画が進められているところです。これらの計画



では、人口減少・高齢化、気候変動の問題など、ここ道南地域でも共通する課題が取り上げられています。

松前町は、昭和29年に一町三村が合併し新生松前町として発足し、今年で70周年を迎えます。合併当時2万人以上あった人口は、本年8月末時点で6千人を切り、高齢化率は50%を上回るなど、人口減少及び少子高齢化が顕著な地域となっています。さらには、地球温暖化による漁業等の影響への対策も喫緊の課題となっています。しかしながら、松前町や奥尻町をはじめとして道南地域は豊かな自然環境に恵まれ、再生可能エネルギーの大きなポテンシャルを持つ地域です。人口減少の鈍化と地域の活性化につなげる持続可能なまちづくりを目指したいと考えています。

このシンポジウムが、地域の発展につながる方法を共有し、理解を深めていただく機会になれば幸いです。

国土交通省 北海道開発局
函館開発建設部 地域連携課

【イントロダクション1】函館開発建設部長 岡下 淳 「第9期北海道総合開発計画」について



このシンポジウムは、3月に閣議決定された第9期目となる「北海道総合開発計画」と7月に北海道が策定した新たな「北海道総合計画」の両計画を推進するキックオフとして開催するものです。

北海道開発は、国土計画の体系上、本州・四国・九州とは異なります。本州・四国・九州は国土形成計画の区域であり、かつての全国総合開発計画（いわゆる「全総」）がそれに当たります。北海道については北海道総合開発計画となり、なお、両計画に上下関係はなく相互に調整するものとされています。このことから、北海道開発が特別な体系に置かれていることがわかります。

北海道総合開発計画は、昭和26年に第1期目の計画が策定されて以降、現在に至るまで、その時々我が国の課題解決に役立ってきました。前計画となる第8期計画は、平成28年に策定されました。その当時、食の輸出はホタテが好調であり、観光もインバウンドが好調という中、食と観光を北海道の価値・ポテンシャルとして活かし、食と観光を生み出す「生産空間」を維持することが目標とされました。しかし、策定当時には想定もできない課題が同時に発生しました。ロシアのウクライナ侵攻による食料安全保障の危機、新型コロナウイルス感染症によって観光立国が揺らいだこと、そして、地球温暖化・気候変動を防ぐためのカーボンニュートラル宣言への我が国のコミットであります。このような世界的な社会環境の大きな変化を受け、現計画を改定し、第9期目となる計画が策定されました。

まず、北海道の価値・ポテンシャルとしては、前計画と同様に食と観光を掲げ、これらに加えて新たに再生可能エネルギー・脱炭素化を位置づけました。これらの北海道の価値・ポテンシャルは、主に北海道の地方部で生み出されています。私どもは、その地域のことをポジティブな意味を込めて「生産空間」と呼称しています。そして、計画の目標を2つ掲げています。

1つ目は、「他で代替できない北海道の価値の最大化」を図るということで、我が国の食料安全保障を支え、観光立国を先導し、ゼロカーボン北海道の実現に向けた各種取組を推進していきます。2つ目は、「北海道の価値を生み出す生産空間の定住環境の維持」を図ることとしています。生産空間は厳しい人口減少に直面しています。そして広域分散型の地域構造という課題も有しています。そのため、デジタル技術の活用や豊かな地域社会の形成、人流・物流ネットワークの形成、災害に強い強靱な国土地域づくりに取り組んでいきます。

計画の推進に当たっては、本日のシンポジウムのタイトルにもある「共創」を重要なキーワードとして、多様な主体と連携・協働しながら進めていきたいと考えています。

【イントロダクション2】渡島総合振興局長 佐藤 秀行 新たな「北海道総合計画」について



新たな「北海道総合計画」は、概ね10年後の「めざす姿」として、北海道の特性やポテンシャルを力に変え、国内外から人や投資を呼び込み、さらに誰もが可能性を發揮し、活躍できる地域を私たち一人

一人の力で作り上げていくことで持続的に発展し、安心して住み続けられる地域の実現を図るということを掲げています。北海道がリーディングケースになれば、それが日本全体に波及し、さらに世界に波及することで、是非そのように繋げていきたいと考えています。

めざす姿を実現するため、政策展開の基本方向として3つ掲げており、①潜在力發揮による成長、②誰もが可能性を發揮できる社会と安全・安心なくらし、③各地域の持続的な発展であります。そして、それに対応する18の政策の柱を設定しました。次に、地域づくりの基本方向として、「個性と魅力を活かした地域づくり」と「様々な連携で進める地域づくり」という2つの基本的な視点を掲げています。これらの視点を踏

まえ、北海道を6つの連携地域に分け、渡島・檜山地域に当たる道南連携地域において、①北海道新幹線の札幌開業を見据えた交流・定住促進プロジェクト、②道南の優位性を活かしたゼロカーボンプロジェクト、③地域に根ざした農林水産業の持続的発展プロジェクト、④暮らしの安全・安心を支えるまちづくりプロジェクト、⑤地域の強みを活かした産業活性化・雇用創出プロジェクト、⑥縄文遺跡群などを活用した魅力発信と誘客促進プロジェクトの6つのプロジェクトを柱に取り組むこととしています。本日、縄文の関係では、山田さんがパネリストに参加しておりますが、縄文文化という地域資源を次世代に継承するとともに、新たな観光資源としても活用し、誘客促進に取り組みたいと考えています。なお、それぞれのプロジェクトには、数値的目標となるKPI（重要達成度指標）を設定し、フォローアップしながら取り組むこととしています。

北海道としては、めざす姿の実現に向けて、道民の皆さまはもとより、先ほどから、共創という話も出ておりますが、国、民間、市町村など、多様な関係者と連携しながら進めていきたいと考えています。

【基調講演】

一般社団法人北海道総合研究調査会理事長 五十嵐 智嘉子
「人口減少時代における関係人口の創出と共創による地域づくり」



本日のテーマである「共創」には、自分たちがどうコミットしていくか、という「共感」が大きく関わります。誰と誰が共に創るのか、という観点も皆さんと考えたいと思います。

国立社会保障・人口問題研究所が出した人口推計においては、2100年の中位推計によれば明治末期と同様の人口規模になりますが、その構造は大きく異なります。高齢者の割合が明治末期で5%でしたが、2100年は40%にもものぼります。

出生率が2.07以上ないと一定規模の人口は維持できません。2100年は実感できないと思うかもしれません

が、例えば3歳の孫が79歳になるとき、と考えるとそんなに遠くもない将来となります。孫になぜこのような状態を放置していたか、と問われるようにはなりたくないですね。将来の不安を取り除き、安心して出会い、結婚し、子どもをもうけ、育てることができるよう、各ステージで手を打つ必要があります。

また、人口減少を食い止めるには30年程度の時間を要するため、松前町のスマート・シュリンク（賢く縮む）SX（サステナビリティ・トランスフォーメーション）ビジョンのように、今よりも小さな人口規模でも豊かに暮らせる社会を作る必要があります。人口の定常化と強化戦略を両輪で進める必要があります。

さて、地域づくりの「課題」とは何でしょうか。課題とは「なりたい姿、ありたい状況」と「現状」のギャップのことです。困りごとだけでは課題ではなく、それを誤解している人が多いと感じています。地域課題の目線は大きく3つ。マクロ（国レベル）、メゾ（地域コミュニティ単位）、ミクロ（個人、企業、組織体）となります。ミクロの目線の例をあげると、バスがなくなり歩いて買い物に行く高齢者が、あずきバーを食べたいけれども、買ったとしても家に帰る前に溶けてしまう、という状況に対して、それを解決しようと冷凍の移動販売車が考案されました。子育て中の主婦が少しの時間でも働きたいという願いから、「しごとコンビニ」という取組が生まれました。個人が感じている「自分はこうなりたいのに、今の状況はここだ」というそのギャップを埋めることが、実は地域の課題の解決にもつながっているという例です。地域においてもまずは目指す姿を議論してほしいと思います。地域課題への対応は、①自分ごととして動く、②自分が参加する、③他者を誘うこと、が重要で、これが関係人口につながっていきます。

3つの事例を紹介します。1つ目は、上士幌町の「縁ハンスプロジェクト」です。町が仲介役となって、事業経営者の課題と、東京圏のビジネスパーソンが持つノウハウをつなぎ、課題を解決する取組です。ビジネスパーソンは、副業兼業として対応しています（なお、現在は休止中）。2つ目は、松前町でも行われている大学と市町村の連携事例です。鶴川高校の探求型学習

に札幌大学の学生が関わり、また地域の人たちもその取組を応援しています。それによって大学生と行政の関係も構築され、大学生インターンシップの受け入れ等に波及する成果にも繋がっています。3つ目は、昭和40年代にできた北広島団地の高齢化による課題に対して、住民主体で取り組んだ事例です。住民が「井戸端会議」で話し合ったことを、自ら実施していく仕組みづくりです。生涯現役地域づくり環境整備事業という厚生労働省の事業を活用しています。例えば、地域には犬を飼っている人が多く、その交流の場としてドッグランを整備しようというアイデアと、認知症高齢者の徘徊検索メンバーを増やすという課題を組み合わせ、ドッグラン会員による検索事業を検討中です。ドッグラン整備のため寄付金を募り、250円以上寄付をするとソフトクリーム1個がもらえるというクラウドファンディングを実施し、70万円以上が集まるなど楽しい工夫が成果につながっています。

人口減少時代の地域づくりには、地域住民が自分ごととして地域の課題を語り合うこと、大人が子どもや若者に背中を見せること、外の力を借りることが大事です。最近耳にすることもある「シビックプライド」は、愛郷心に止まらず、自分が関わっていないと生まれにくい地域への誇りであり、これによって共感が生まれ、一緒にやろうという人たち内外から現れ、手を組むことができるのではないのでしょうか。

【パネルディスカッション】「共に創る、道南の未来」 〈コーディネーター〉

一般社団法人北海道総合研究調査会理事長 五十嵐 智嘉子
〈パネリスト〉

東急不動産株式会社 松前事務所長 関口 冬樹
ひやま漁業協同組合青年部 奥尻支部長 川瀬 美弘
縄文DOHNANプロジェクト 顧問 山田 かおり
(山田総合設計株式会社地域ソリューション部課長)

○ 自己紹介、取組紹介

五十嵐 本日のテーマは「共創」。誰と誰が共に創るのか、一緒にディスカッションしていきたいので、会場の皆さまも一緒に考えていただければと思います。それでは、パネリスト3名の方から、それぞれ自己紹

介と取組についてご紹介をお願いします。

関口 東急不動産(株)に入社後、マンション再開発や商業施設開発を担当し、令和4年から再生可能エネルギー部門の担当となり、東京から松前に異動しました。松前町内に、大型の風車12基と蓄電池設備(NAS電池)を整備し、一般家庭の年間消費電力約24,000世帯分に相当する電気を作り出しています。2027年度を目指してさらに12基を整備予定です。非常時に一部住民に電力を供給できる地域マイクログリッドシステムの運用も開始しています。



松前町のスマート・シュリンクSXビジョンの作成にも関わりました。松前高校に入学する生徒が減り続ける中、高校存続のため、子どもたちに町のことをよく知ってもらい、町での就業・就職が職業選択の一つとして考えてもらう契機になればと、「まつまえ未来ラボ」というホームページを作成しました。町の魅力や理解を深めるための情報、さらには就職情報等も発信しています。

大型風車と地域住民との接点を創出するため、風車の公園も整備しています。松前町の子どもたちに、松前の風をイメージしてもらい、ベンチやキャラクターをデザインしてもらいました。松前高校の生徒には、公園の一角を活用してそば栽培にも参加してもらっています。シビックプライドという言葉もありますが、まちづくりに直接関わることで自身の住んでいる地域に愛着・誇りを持ってもらい、体験参加型のまちづくりとなるように意識しています。まちづくりの拠点として、バス待機スペースやコワーキングスペースの機能を備える、「TENOHAS松前」を本年5月にオープンさせました。交流人口の獲得に繋がりたいです。最後に、松前町のデジタルマップ「まつまえの歩き方サクサクMAP」を紹介させていただきます。これは、松前高校の生徒と札幌大学の学生が連携して、生徒・学生の目線を取り入れて制作しました。例えば、松前町には全国に誇れる資源である桜がありますが、早咲き、中咲き、遅咲き、代表品種の分布などを見える化し、観光客に

リアルタイムで発信できる仕様としています。このようなものがプラットフォームとなり、松前のまちづくりや活性化に繋がればと考えています。



まつまえの歩き方サクサクMAP

五十嵐 高校生と一緒に活動してみて、どんな感想をお持ちですか。

関口 松前の高校生にとっては、お兄さんやお姉さんのような存在が地元にはあまりいません。高校生が大学生と交わることで、最初は引込み思案なところもありましたが、とても良い連帯感や関係性が芽生えたと感じています。その関係性の継続が次の課題です。

五十嵐 ありがとうございます。次は川瀬さんお願いします。



川瀬 奥尻町の高校を卒業後、父が漁師だったこともあり、自身も漁師になりました。父にはまだまだ及ばないところですが、自身のコミュニティを活かし、情報共有を行いながら島の漁業へ貢献したいと考えています。

近年、海水温上昇の影響から、回遊魚の水揚げが大幅に減少しているため、養殖への事業転換が強いられる状況です。そのため、ウニ、アワビ、サーモン、そしてホソメコンブの養殖を始めました。ホソメコンブは、天然藻場にも生息していますが、ウニやアワビの餌になるだけで、未利用資源となっていました。そこで、令和2年度、有識者等で構成する「奥尻地区海藻生産・活用調査検討協議会」を立ち上げ、ホソメコンブの養殖の実現可能性や付加価値等につい

て検討しています。ホソメコンブの特徴は、長さ1～2m、葉幅5～15cmとやや細めとされています。

今後の展開については、令和4年度に奥尻町が環境省から脱炭素先行地域に選定され、同年12月には、町が「奥尻町ゼロカーボンシティ」を宣言しました。私たちもできることに取り組もうということで、先述の協議会が主体となり、ブルーカーボン・クレジット認証に向けて動いています。次に、新たな商品開発の取組です。コンブから抽出したエキスを使ったオーガニックコスメの化粧水を開発・販売しています。奥尻高校の生徒にも商品開発に関わってもらい、香料などのコンセプト設計や、パッケージデザインに協力してもらいました。この化粧水は、本年8月、北海道エアシステムの機内販売商品に採用されました。また、島内には、冷凍自動販売機を2台整備しており、消費者が水産物等を24時間購入できます。このような機材等も活用しながら、引き続き商品開発に取り組んでいきます。



子どもたちと一緒に養殖ホソメコンブを収穫したときの様子

奥尻高校の総合学習では、漁業に関心を持ってもらいたいと、スクーバ*や安全対策としてのロープワークを教えています。奥尻高校には、島留学生の制度があります。島内の少子化が進行し、道立の奥尻高校は廃校の危機にありましたが、道立から町立に移管することで、高校が存続されました。令和5年度には、島留学生の一人が漁師として島に残りました。私も親方として指導に当たり、今では立派な漁師の一員として島の漁業を支えています。今後も、地域活動のリーダーとして、指導や援助を続けていきたいと考え

***スクーバ (scuba)**

水中で自由に呼吸するための装置を指す英語の単語である。この言葉は、Self-Contained Underwater Breathing Apparatusの頭文字をとったもので、自己完結型水中呼吸装置という意味を持つ。ダイビングにおいて、水中での呼吸を可能にするために使用される。

ています。

五十嵐 冒頭にコミュニティと情報共有という話がありました。どのようなコミュニケーションを取っているのでしょうか。

川瀬 漁業研修所に通っていたときの同級生が全道各地にいまして、普段から漁業の近況等について情報共有しているという感じです。

五十嵐 ありがとうございます。最後に山田さんをお願いします。

山田 函館市に生まれ、高校生のときは早く外に出たく、市外の短大に進学し、そして群馬県の会社に就職しました。群馬県での経験が現在の地域活動に繋がっています。



群馬県には「上毛かるた」という伝統遊びがあります。県大会もあるぐらい盛んなのですが、読み句に群馬県のことを網羅され、幼少期から上毛かるたに触れることで、自然と群馬県人には地域のことが染み付いているという状況を目の当たりにしました。私自身も、函館を、道南全域を盛り上げたいという思いを持ち、函館に戻り、地域活動に関わるようになりました。活動をして気づいたことは、地域活動に関わる人は多いのですが、横の繋がりが不足しているという課題です。人と人を繋ぐエリアマネジメントが重要だと感じました。そのような中、偶然参加した縄文文化のイベントで、学芸員の方から「縄文の心」を教えてもらったことが「縄文DOHNANプロジェクト」の立ち上げのきっかけとなりました。助け合いの心、絆、自然やモノに感謝する心、温故知新、豊かな感性であり芸術性というものです。私たちにも縄文人のDNAが入っていると思うので、縄文の心を軸にすることで、みんなが繋がると考えています。プロジェクト立ち上げ当初は、縄文遺跡群の世界遺産登録に向けて地域を盛り上げたいという目的で活動してきましたが、現在は、子どもたちの郷土愛を育成すること、関係者同士の交流を深めることを重視しています。

具体的な活動としては、子どもたちに縄文を楽しく

知ってもらいたいということで、各地の土偶をモチーフにした応援キャラクターを制作し、そのキャラクターを活用した取組を行っています。例えば、応援キャラクターが登場する紙芝居です。世界遺産登録時期がコロナ禍であり、人との交流が難しい時期だったので、地元のケーブルテレビ事業者の協力を得て、「縄文紙芝居」という映像コンテンツを制作しました。地元の大学や学生の協力を得て、フランス語、中国語など6言語のバージョンも制作し、YouTubeで発信しました。次に、応援キャラクターの「カックー」をアレンジし、各市町の特産物等をPRする「ご当地カックー」を制作し、道の駅など人が多く集まる場所に「ご当地カックー」パネルを展示しています。



そして、活動当初からどうしても作りたかったのが「縄文かるた」です。5年かけて、やっと今春に完成しました。渡島・檜山地域の子どもたちから、自分たちの地域の誇りをPRする読み句の募集をしたところ、530名から630通にもものぼる読み句が届けられました。完成したかるたは、渡島・檜山地域の小学校や子どもたちが集まる場所に寄贈させていただきました。

活動を続ける中で課題も出てきました。例えば、特定の人に業務が集中することです。このままでは活動の継続が難しいと感じたので、会の役員を増やすことで業務を分散し、また、企業協力も、協賛から企業会員に変更することで自分ごとと感じてもらえるような関係構築に取り組んでいます。この4月には、新たな代表が就任し、私は代表を退き顧問になりました。活動が継続する仕組みづくりに取り組んでいきます。

五十嵐 2つ確認させてください。1つ目は、活動の

範囲を函館市だけでなく道南全域にしたのはどのような理由からでしょうか。2つ目は、この会の活動の財政的基盤はどこにあるでしょうか。

山田 道南地域の子どもたちには、いろいろな市町と手を繋ぎながら行動するというのを植え付けたいと考えています。多くの地域活動は、手弁当で行われていたり、一時的な補助金頼みという例が多いです。本会では、会費の他、応援キャラクターをデザインした縄文缶バッジのカプセルトイを函館山ロープウェイなどに置かせてもらい、その売上も活動費に充てています。

○ 会場参加者によるディスカッション

パネリストの発表後、会場参加者によるディスカッションタイムが設けられました。3～4名のグループになり、パネリストの話に共感したことなどを意見交換し、全体で共有しました。



会場参加者によるディスカッション

○ パネリストから会場参加者へのメッセージなど

山田 地域を誇りに思う子どもたちが次世代の子どもたちに伝えていく仕組みを作りたいです。そして、地域の外に一度出た子が、また戻りたいと思える地域づくりを続けたいと考えています。

まちづくりは難しいと考える人が多いと思いますが、地元のイベントやお祭りに参加してみるとか、ゴミ拾いをしてみるとか、自分ができるところから地域に関わることでまちづくりに繋がります。まちに関心を持ち、まちに関わりを持つ人たちが増えるような取組を進めていきたいです。

川瀬 これからも、子どもたちに漁業の体験をしても

らい、興味を抱いてもらう取組を継続したいと思います。また、島外から来ている留学生などに島の良さを見せたい、そして島で感じた魅力を外に伝えてほしいです。自分たちの取り組んでいる活動は、共に創るという今回のコンセプトそのものだと感じています。

関口 全国に誇れるパイロットケースを松前で創りたいと考えています。東急不動産と一緒に事業を行うと、地域のことをしっかりと考えてくれていると思ってもらえるような好事例を皆さんと一緒に作りたいと考えています。子どもたちが松前で価値ある体験をして、将来松前に戻りたいと思えるような仕掛けづくりをしていきたいです。

○ コーディネーターによる総括

五十嵐 3人それぞれ活動しているフィールドは異なりますが、共通している点は多いと感じました。キーワードは、子どもたち、共に創る「共創」。自分の気づいたどんな些細な^{ささい}なことでもよくて、共に創るという発想を持つこと。そして、それぞれの情報ネットワークを通じてここに皆さんの活動が体现されていると感じました。本日のシンポジウムが、共に創る道南の未来への第一歩になればと願います。

【閉会挨拶】 奥尻副町長 田中 敦詞

道南地域では、人口減少が喫緊の課題となっています。基調講演では、その課題を真っ正面から取り上げ、人口減少時代における関係人口の創出、そのための共創による地域づくりについて、事例を含めて紹介いただきました。3名のパネリストからは、道南地域には、縄文遺跡などの個性豊かな歴史と文化、朝廷に献上されたといわれる幻のホソメコンブなどの特色ある食材、日本海からの風を利用した風力発電など多様なポテンシャルがあることが紹介されました。各地域が元気になることで、人口減少を少しでも鈍化することができればと考えています。本日のシンポジウムが一つの契機となり、道南の未来が少しでも明るくなることを祈念しています。

